



スポーツ環境におけるハラスメント問題：
背景と今後の課題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-09-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 香 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/14582

第2回講演

スポーツ環境におけるハラスメント問題 ——背景と今後の課題——

山口 香

はじめに

皆さま、こんにちは。ご紹介いただきました筑波大学の山口と申します。本日は本当に寒い中お越しいただきまして。私、昨日宮崎で仕事があったのですが、宮崎も寒かったです。やはり全国的に寒波が来ているようでとても寒いですが、心が寒くならないような話ができればいいかなと思っております。

今、熊安先生からお話がありましたように、ハラスメントと言うよりは、一般的にはスポーツ界における体罰とか暴力といったことに比較的焦点が当たって報道がなされたのではないかというふうには考えています。ただ、ハラスメントの問題も当然含んでいるわけで、そういった問題が起きる背景とか、これから起きないようにするにはどうしたらよいかなど、女性だけではなく当然男性もですが、スポーツ界全体で話をしていかなければいけないことかなというふうに思っております。

振り返って、なぜこういった問題が起きたのかということを考えてみると、柔道自体は嘉納治五郎という人が柔術から柔道に変え、今の柔道を築き上げ、現在では世界で約200の国と地域で行われているのです。ということは、その柔道の持つ教育的な意味とか人間性を伸ばすといったところが世界にも認められて広まっている。にもかかわらず、お家元の日本で、人間というか選手たちの尊厳をある種損なうようなこういった行為が行わ

れていたということは、やっていた人たちがどうということではなく、柔道に関わるすべての人間がやはり襟を正して、もう一度柔道自体がどうあるべきかを考える、いいきっかけになったのではないかと考えております。

2020年東京オリンピック・パラリンピック開催が決まりましたが、私は1964年生まれで、東京オリンピックの年生まれなんです。ですから、今年が東京オリンピック50周年ということで、私もちょうどいい年齢になりましたけれども、そういったところで言うと、東京オリンピックが持っていた意味というのは何だったのだろうか。特に柔道においては、そこを境に大きくベクトルが「競技」というところに向けたような気がしています。

それまでも、もちろん、競技、勝つこと、勝負といったところも、嘉納治五郎先生は決して否定はされていないのです。ただ、競い合うということは勝つことに意味があるのではなくて、自分の弱さと向き合ったり、相手と競い合うことによって自分の進歩を確認したりということで、自分自身を見つめる一つの材料として試合があるんだというようなことを言っただけなんです。ただやはり現実として、東京オリンピックで正式な種目に入り、そして日本国民の「金メダルを取ってほしい」という願いに後押しされるかたちで、少しずつ人間性とかあるいは教育的な価値というところからベクトルがずれていって、勝てばいいということではないのですが、「勝つ」ということが第一義的な目的になってしまった部分も否めないのではないかとこのように考えています。そういったところも反省しつつ、今取り組んでいるわけですけど、今日は柔道のことだけではなくスポーツ環境におけるハラスメント問題について私の思うところを少しお話させていただければと思っております。

女性スポーツの歴史

まず、女性スポーツの歴史から振り返ってみたいというふうに考えています。今行われているオリンピックは近代オリンピックと言われるものです。その近代オリンピックのモデルになった古代オリンピックというのがございます。この古代オリンピックは、ギリシャ神話の神々たちに捧げる

宗教的な意味合いも非常に強かったものでした。ただ、その当時のオリンピックの精神というものは、今実現はされていないのですが、古代ギリシャで行われていた古代オリンピックは、当時は都市国家の争いが非常に多く常に戦いを繰り返して、そのことを憂えた方々が、このオリンピックというものを通して友好とか平和といったことを訴えようというような意図もあったのだと思うのです。古代オリンピック開催期間は古代ギリシャ全土が全部停戦をしていたのです。そういった平和的な精神と青少年の教育を謳って1896年に、第1回目の近代オリンピックがアテネで開催されました。

ただ、そこに女性選手は参加することが許されなかったんですね。1896年の第1回大会には女性は参加しておりません。それというのも、古代オリンピックは紀元前の話ということもあり、女性は、参加することも見ることも許されなかったのです。そういった歴史的な背景があったからということもありますが、第2回のパリ大会から女性が初めて参加したのが、女性にとってのオリンピックの始まりでございます。

そして、1904年の新聞記事を見てみると、これは日本の新聞の記事ですが、「女子のスポーツが発達すると、女子らしさが失われ、品位を下げるのではないか」というような論調があったようです。おそらく今でもそういうふうに思っている人はもしかしたらいるかもしれないと思うのですが。

つまりスポーツにおいて、女性が入ってきたのは後付けだということがあります。おまけとは言わないまでも、男性のスポーツからスタートしたというのは事実です。スポーツで筋力をつけ、体を鍛えていくということが、女性らしさと対極にあるというふうに考えられていたことも当時ございました。もしかしたら今でもあるかもしれません。

そして、日本における女性スポーツの歴史ですが、1928年第9回アムステルダムオリンピックに、日本女性として初めて人見絹枝選手が参加をいたしまして、800mで銀メダルを獲得いたしました。これが日本女性としては初のメダル獲得です。これが当時の写真ですが、二人を見ていただいてもわかりますけれど、非常に女性としては大柄な二人なのですが、800mというのは、ご存知かどうかわかりませんが非常に厳しい競技なん

ですね。最後に一位二位を競うデッドヒートになって倒れこんでしまうシーンがありまして、女性にこんな激しいことをさせていいのか、といったような議論も起こったようです。

そして第11回ベルリン大会（1936年）では、前畑秀子が、「前畑ガンバレ！」のあのアナウンスでも有名ですが、平泳ぎ200mで日本女性としては初めての金メダルを獲得いたしました。こういったような世界そして日本の女性スポーツの歴史があります。

第1回大会では女性が参加できなかったということを申し上げましたけれど、近代オリンピックの父と言われるフランス人のピエール・ド・クーベルタン男爵という方がおられます。このピエール・ド・クーベルタン男爵は教育者でもあらられて、青少年に対してスポーツは非常に意義があるし価値があるということで、古代オリンピックを模して近代オリンピックを是非作りたいという発想をされて、オリンピックを作られた立役者であります。ただ、そのピエール・ド・クーベルタン男爵であっても、女性の「汗」によってオリンピックを「汚す」べきではないと信じており、女性には男性の勝者に冠を授けるなどの適した役割があるというふうに生涯を通して信じていたようです。もちろん、現在の状況と当時の状況を比べることはなかなかできないですけど、当時のスポーツ界の中では先端を行かれていた、おそらく考え方としては教育者として先端を行かれていた人でも、このような考え方があったという事実があります。

女子柔道の母

私は女子柔道の先駆者とかパイオニアとかいうふうによく言われるのですが、競技を始めた最初の人間と言いますか、女子の試合が始まってから最初に戦った女性ということではパイオニアかもしれないのですが、実は女子柔道には、二人の母がいると言われていています。女子柔道の歴史についても背景として少しお話をさせていただければと思っております。

こちらに写っていらっしゃるのが福田敬子先生です。福田敬子先生は、講道館女子9段、アメリカの柔道連盟からは女子ということではなくて

10段の段位をいただいています。この方はどういう方かと言いますと、この福田敬子先生の祖父にあられる福田八之助という方がおられます。この福田八之助という方は、天神真楊流という柔術のお師匠でいらっしゃいました。嘉納治五郎は柔道をまったくさらのところから作ったわけではなく、天神真楊流や起倒流といったいくつかの柔術を学び、それを統合して柔道という統一した形でスタートさせたのが嘉納治五郎なのです。ですから福田八之助というのは、嘉納治五郎にとっては師にあたるわけです。その孫がこの福田敬子先生ということになります。福田八之助先生の慰霊祭の時に嘉納治五郎先生が福田家を訪れて福田敬子先生にお目にかかった時、講道館にも女子部があって女性でも柔道ができるから、お爺さんの遺志を継いで是非あなたも柔道をやったらどうだというような声掛けをされて、直々に嘉納治五郎先生に請われて、21歳で講道館に入門されたそうです。その後、嘉納治五郎先生から学ばれました。

ただ、当時嘉納治五郎先生がおっしゃっていたのは、「女性には試合はまだ早い」。明治の時代ですから、当時は女性が足を見せること、あるいは自転車に乗ることすら憚られた時代であったんですね。でも、嘉納治五郎先生の素晴らしいところは、女性には柔道は有益であるというふうには言ってらっしゃるんですね。国民体育、男性であっても女性であっても、身体運動をすることによって体や心を鍛えて、それが国力につながるというような考えをお持ちでいらっしゃいました。だから、女性に柔道を学ばせることにも積極的であったようです。

ただ当時とすると、大変言い方が難しいのですが、皆さん柔道をご覧になってわかるように、足は広げるわ、男女で寝技をやったりと、当時あれを見たらふしだらと言われてもおかしくないような、そういうふうな危惧があったと思うのです。ですから、それをまして試合でやるということは、技術が伴っていないのに女性に試合をやらせたら、はしたないというよりは怪我をすることが怖いとか、女性に柔道をさせるということは、体に良いからさせるのであって、勝負にこだわって怪我をしたり、体を壊したりしたら、これは目的に合わないということで、まだ女性の体力と技術が向上していない段階では試合は見合わせたほうがよいというようなことを

おっしゃっていらしたのです。ですから、福田敬子先生がされていた時代は、女性の柔道のあり方は基本的には形（かた）、空手などでいう形ですね、形と乱取り。試合は一切ありませんでした。ただ、技術的には男性と同じように日々訓練をされていましたから、福田敬子先生もかなりの実力者であったというふうに伺っております。

福田敬子先生は、ずっと指導者としてもされていたのですが、21歳で講道館に入門されていますけれど、当時で言えば結婚していてもおかしくない歳です。その後柔道を学ばれて行って、嘉納先生がお亡くなりになって、言っではなんですけど段々いい年になっていくわけです。嘉納治五郎先生は、遺言ではないですけど自身のお嬢様に「福田敬子を頼む」ということを言われているのですね。柔道だけさせないで、ちゃんと相手を見つけて見合いをさせて結婚させてやってくれ、女性の幸せもちゃんと担保してやってくれというようなことを言われてるんですね。お嬢様はその言葉を実行に移して、福田敬子先生に色々な方を紹介して、是非結婚してくださいというようなことを仕向けるのですが、ただ福田敬子先生、当時のことを言っではしゃいます。私もお目にかかった時にお話を伺ったのですが、当時は家庭に入るということは指導者を辞めるということだったと。講道館の練習、お稽古というのは夕方から始まります。学校から帰って来た、あるいは仕事が終わった人たちが講道館に集まってきますから、夕方から始まります。今のように、旦那さんに、「じゃ、私これから柔道の指導に行ってくるわよ。ご飯は作ってあるからお願いね」というわけにはいかないと。その中で福田敬子先生は、「私は柔道か結婚かを選ばざるを得なかった。両立するということは当時は考えられなかった」というふうにおっしゃっておられます。そして「私は柔道と結婚したのよ」というふうにおっしゃっておられました。

ただ、柔道と結婚したとって柔道の指導のほうに精進されていくわけですが、当時としては試合がなかったですから、女性の指導者といっても、言っではなんですけど評価が非常に低かったと考えられます。やはり男性は試合がありましたから、強い方、試合で勝っている人、そしてさらに指導者として優秀な人というのが評価されたのであって、女性がどんなに技術

を持っていたとしても評価されなかった時代だというふうに考えられます。ですから、福田敬子先生は東京オリンピックの後、1966年に53歳で渡米されます。私は今年50歳ですけど、今からアメリカに渡る勇気があるかというとなかなか、相当な勇気が必要だと思います。当時としてはなおさらだったと思います。

では、なぜ53歳という年齢で福田敬子先生が渡米を決断されたのかということ振り返ってみると、ちょうどこの頃にお母様が亡くなられているのですね。お兄様のところにお母様と一緒に居候というか、していたわけですけど、お母様がおられる時にはまだよかったというか、お兄様としては別に福田敬子先生がいても問題がなかったと思うのですけれど、ただ本人としては、やはりお兄様の家族と一緒に当時嫁に行かない50過ぎの娘が一人いるということ、そして言うてはなんですけれど食い扶持もないと。そこで福田敬子先生はアメリカに行くという決断をなされたのではないかと思います。

アメリカに行かれる数年前に一度アメリカに指導に行かれていますね。そこで指導されて帰られる時、福田敬子先生はアメリカを立つ時、お弟子さんというか教えた生徒さんたちに、「もう私はこの年ですから、今回はとてもいい指導ができたと思うけれども、次に来ることはないと思います。皆さん、お元気で」というふうにご挨拶をされたら、アメリカの人たちは男性も女性も口を揃えて、「そんなことはありません。福田先生は女性であっても、試合をしていなくても、柔道に対して立派な技術をお持ちです。素晴らしい指導者であられます。いくつになられても是非またアメリカの地に戻って来て、私たちを指導していただきたい」ということをおっしゃられた。「その時の言葉がとても印象に残った」というふうに福田先生はコメントをされておられました。そして日本に帰って来て、自分の立場、先ほど言ったような立場を振り返った時に、日本で柔道で食べていくというのはある種不可能なんですね。講道館で柔道を教えていても微々たるお金しかもらえない。柔道を生業として食べていける時代ではありません。特に女性は。ところが、アメリカでは柔道を職業として、女性であっても指導者として自立できる道があるんじゃないか、ということ

53歳という年でアメリカに行かれた。そして、サンフランシスコで自分の道場を開き、昨年（2013年）99歳でお亡くなりになられたんですけども、今年は福田敬子先生が100歳になられるから、4月のお生まれだったんですけども、6月に福田先生が長く主催されてきた柔道のイベントがあるので、その際に盛大にお祝いしようと計画をしている時、2月ですね、その時に福田敬子先生がお亡くなりになられたという訃報を受けて、皆悲しかったです。ただ、99歳で亡くなられるまで、アメリカはもとより世界各国で指導をなされました。もちろん、試合というところでは福田敬子先生は実績はありません。ただ、女性であって、そして女性の柔道を広められた女性の指導者として、男性にももちろん大きな影響力があったと思います。広められた功績というのは素晴らしいものであったと思っています。

福田敬子先生は講道館女子9段です。この9段を受けられたのが94歳の時です。福田敬子先生のモットーは「強く、やさしく、美しく」。私と違って、非常に我慢強く、物事に対して色々言いたいことはたくさんあったんですけども、ぐっと自分の中に入れて、多くを話さない方でした。ただ、私が福田敬子先生が9段を受けられた翌年にお祝いを兼ねて先生にお目にかかった時には、まだお元気でしたけれども、なんというのですか、いい意味でチャーミングになられたというか、しゃべっていると時々ちょっと毒を吐くんですね。私と話している時に「山口さん、あなたは何段？」と言われたんです。「先生、私は今6段をいただいております。講道館女子6段です」。「あっ、そう。あなた、いくつ？」って言われてですね、私45歳だったですか、そのくらいですと申し上げたら、「あっ、そう。早いわね、今の方は。段をもらうのが」と言われたんですね。「そうですね。先生の頃は大変だったんですよね。段をいただくのも」。「そうよ」ってなんか美川憲一風になっちゃうのですけれど。そんな感じでもそもそも毒を吐かれるんです。「私はね、4段から5段になる時に30年かかったのよ。女子が段を受けるというのはそれくらいハードルが高かったのよ」というふうにおっしゃった。その話を帰って来て同世代の子たちに話した時に、「みんな、女が9段までいくには長生きしなきゃ駄目なのよ。94歳でな

ければ9段はもらえないのよ」とというような話をしましたけれど。つまり、当時の講道館というのは、試合というよりは男性のための段だったんです。男性は「講道館6段」「講道館9段」なんです。でも、私たちがいただいている段は「講道館女子6段」です。ですから、もうはっきり区別しているのです。男とは違うのですよと。当時は特に試合がなかったですから、余計区別したかったということもあったのでしょう。にもかかわらず、昇段が極端に難しかったというのは、なんというか、ちょっと残念だなと思います。

嘉納治五郎先生直々の弟子で、いわば柔道に身を捧げた女性であった、この功績というのは今の女子柔道の繁栄を見ても、私がパイオニアなんて言われるのはとてもはがゆくて、こういった方がいたから今の女子柔道があるんだということは、講道館においてもその功績というのは当然称えるべきものであろうと。そして、段というのは、国民栄誉賞と一緒に、亡くなってからも当然授与できるんです。ですから、99歳まで頑張られて、もちろん94歳で9段をあげているからあまり期間が短すぎて10段をあげられない、それはもっと早く9段をあげていればよかったですから。ですから私は、10段を差し上げられなかった講道館には、未だにちょっと残念なものがございます。そこに講道館のなんというかメッセージ的なものが何かあるような気がして、女性差別とは私は言いたくないのですが、そういったものがあったのよと福田敬子先生がおっしゃっていた、そのままだなど。亡くなられてまでもやはりそういったものを受けられなかったというのは残念だなと思います。でも、えらいのはアメリカの柔道連盟。今は講道館だけでなく世界中の国が段を発行できるんです。そこには「男子何段」「女子何段」と言っている国はなく、全部「柔道何段」です。アメリカは福田敬子先生に、亡くなられる前に10段を差し上げています。ですから、日本で生まれ育ち、そして嘉納治五郎を師と仰ぎ、柔道に人生を捧げられた福田敬子先生を日本が評価できない、講道館が評価できないということは、私は非常に残念なことだと思っています。

ラストィ・カノコギさん。この方も2009年にお亡くなりになられてしまったんですけれど、この方も柔道の母と私は考えている方です。カノコ

ギというのは日本名です。アメリカ人ですけれど、日本の男性と結婚されています。ニューヨークに生まれられて、福田敬子先生と比べると体つきもがっちりとしていますし、柔道も強そうな感じで、すごく大柄な方でいらっしゃいました。私は「ビッグママ」と呼んでいたんですけれど、この方はニューヨークに生まれて、決して裕福なところに生まれたわけではなくて、当時ラスティが言うには、平たく言えば私は不良だったのよ、悪いことをいっぱいしたと。なんでかと言うと、やっぱり貧しさもあったけれど、自分のエネルギーをどう発散していいかわからなかったと。そこで出会ったのが柔道だったのよ。柔道と出会ってからは、自分のエネルギーを柔道に注ぎ込むことができたから、すごく柔道に打ち込んで、こんな素晴らしいものがあったのかとすごく熱中して、やり始めたよ。

当時からラスティは強かったそうです。YMCAの柔道教室で、非常に強かった。強くなっていったんだけど、当時アメリカでも女子の試合というのはなかったんです。ですから、試合に出て、腕試しはできなかった。ある時、大会があって、チーム戦だったんですね。たまたまチームのメンバーの男の子一人が直前に怪我をしてしまった。一人怪我して、そこは不戦敗になるわけですが、そうすると、0対1からスタートしなければいけないわけです。周りの男の子たちが皆一斉にラスティを見て、「お前が出る。どっちかっていうと怪我した子よりお前のほうが強いだろう。俺たちにとってもいいから、出ちゃえ」。「でも、女子は出ちゃいけないっていうルールだよ」。「大丈夫だよ。わからないから」。そういうふうで説得されてですね、ラスティは皆がそういうんだし、自分でもやっぱり試合というのをやってみたかった。もちろん、練習の中では相手と乱取りをやって、自分が強いと思ったこともあったけれど、でも試合というのはまた違う。やってみたいと思って、出場したんだそうです。ラスティの活躍もあって、見事にそのチームが金メダルを獲得した。優勝したわけですね。ところがやっぱり、相手チームなのか誰なのかわかりませんが、「あれは実は女だ」というのを通報されて、結局ラスティだけが金メダルを剥奪されたのではなくて、チーム全体がルール違反だということで金メダルは剥奪されたそうです。

ラスティはこの経験があって、どういうことを決意されたかということ、なんで女は試合ができないんだと。男であっても女であっても、自分が柔道をやって精進していて、戦いたい、挑戦したいという気持ちは一緒じゃないか。にもかかわらず試合ができない。出ても女だからという理由で金メダルを剥奪される。これはとても悲しいことだ。自分の後輩たちには決してこういう思いをさせたくないということで、その後立ち上がって、女性の試合をスタートさせられるように、国際柔道連盟やオリンピック委員会といったところに働きかけをするようになっていったわけです。

そして1980年、第1回世界女子柔道選手権がラスティのお膝元、ニューヨークで開かれることとなります。これはなぜニューヨークだったかというと、当時私は選手としてこの大会に行っています。15歳の時です。ちょうどこの数年前に国際柔道連盟は、各国の要請を受けて女子の世界選手権をやるということは決めたのです。女性の選手たちが世界選手権をやりたい。「わかった、じゃあ五大大陸のうち三大陸で大陸選手権が開かれたら、女子の世界選手権をやろう」というところまでいっていたのです。それで、その条件がクリアされたので、いつ開かれてもおかしくない状態ではあったのです。ところが一つ問題があったのは、どこも「うちがやります」と手を挙げなかったのです。なでしこのサッカーでもそうですが、正直ワールドカップで優勝しましたが、皆さん、優勝しそうになってから見ませんでしたか。皆、前から応援していたような顔をしていらっしゃいます。でも、「ワールドカップなんか行くの？」みたいな。知らなかったですよ。報道もされなかったです。でもまあ、ああやって優勝したから、わあーとなったし、なでしこリーグも少しずつスポンサーがついたりしましたが、男性と女性では、ワールドカップで優勝したってまだまだ雲泥の差です。ですから、注目されていない中で大会を開くということは、その主催者のほうにはリスクがあるわけです。やったからといってスポンサーがつくのか。赤字になる可能性だってあるじゃないか。どこの連盟も引き受けなかったのです。

そこで手を挙げたのがラスティです。アメリカでやると。それもニューヨークがやると。アメリカがというより私たちがやると。だから第1回を開いてくれということで、ラスティが掛け合って、大会の組織委員長と

して奮闘をされて、第1回大会が開かれました。その当時の話を聞くと、ニューヨークの柔道連盟がやったからというのではなく、ラスティ一人がやったのです。「やるっていうからやってもいいけど、俺たちは責任を負わないよ。お前一人でやれよ」みたいな雰囲気だったそうです。ですから、当時資金もない中で、スポンサーもわずかばかりのところでお金も入ってくるのかわからない、でも大会は開かなくてはいけないので、ラスティは自分の家を抵当に入れてこの大会を開いたということを書いてらっしゃいます。

組織委員長と長がつくとえらそうに思えますけれど、当時私はラスティが組織委員長か何かも全然わからなかったのですけれど、覚えているのは、なんかこの大きなお母さんみたいな人がとにかく走り回っている。私たちの空港での出迎え、ミニバスみたいなので出迎えて、それから練習場への送り迎え、お弁当の手配、表彰台でのプレゼンター、もう何から何までラスティが走り回ってやっているというイメージがありました。だから本当に手作りで、無駄なお金が使えないわけです。人を雇えば簡単です。送り迎えなんか自分でしなくてもいいです。でも、人ひとり雇うということはお金が掛かるということなんです。だから、本当にラスティの気持ちに賛同したボランティアグループが開いた大会だったのです。マディソン・スクエア・ガーデンで行われた大会に私たちも参加いたしました。

後になってラスティが言ってくれたのは、あの時は日本が参加してくれたということが、私には何よりうれしかったと。先ほどのオリンピックに女性は出なかったというのと同じで、第1回にもし日本の女性が——強い弱い関係ない——出ていなかったとしたら、この大会は価値がないとは言わないけれど、おそらく世間の人たちに認められなかったかもしれない、あなたたちが来てくれたこと、戦ってくれたことに対してすごく感謝しているというようなことを言っていました。

女子柔道への思い

そしてさらに彼女が亡くなられる直前までメールなどでやり取りをして

いたのですが、彼女が言っていた言葉を今でも私は覚えています。これだけ保守的な日本が——旦那さんが日本人だからよくわかるんですね、また熊本の人ですから肥後もこす、とっても優しい人ですけど亭主閑白なところもあった——講道館のことも私はよく知っているわよ、これだけ保守的な日本で、あなたたちが頑張って、女子柔道がここまで社会的にも認められる地位にまでできたということは、素晴らしいことなのよと。世界で今、女性がまだスポーツができない国がどれだけあるか。たくさんある。でも、日本ができたんだから、他の国でできないということはないのよ。あなたたちがロールモデルなのよ。あなたたちが頑張って世界に示して行ってほしい。もっともっとできることはたくさんあるわよというふうに言っていたのを今でも覚えています。

今の選手たちは競技力としては一流です。世界のトップクラスです。この第1回の世界選手権の時には、私は銀メダルを取りました。でも、他の選手たちは試合に出たことがなかったので、一回戦二回戦で皆負けました。力はあったかもしれませんが、でも、競技という場に出たら、駆け引きとかそういったことがあったので、勝つことができなかった。それはそうです。福田敬子先生の時代から、女性は試合はなしと言われていたのです。やりたいと言っても、嘉納治五郎先生がこう言ったと。柔道の中にあっては嘉納治五郎先生は神みたいな存在なので、神の言葉はずっと生きるんです。「女には試合をやらせない。やらせるな」といった言葉だけが生きて、なかなか試合ができなかった。そういった中でなかなか力を発揮することができなかったのです。でも、そういう意味では、福田敬子先生の無念な思いというのですか、もちろん、やられたことはたくさんあったと思います。やったという思いもあったと思います。でも、先ほどの段の話もありますし、なぜ日本から出て、世界で道を開かなければいけないのかというような思いであったり、女性に試合の道を開いてくれたラストィ、そういった先輩たちの思いを私たちは受け継いでいく使命があると、彼女たちはみんな戦って、私たちのために少しずつ道を切り開いてくれた。でも、そのやっとなり切り開いてくれた道をあたかも前からあった道のように、後から生きている今の選手たちが当たり前のようにそれを享受して、ただ歩い

て行ったのでは、まだ道は決して太くありません。この道をもっともっと開いて、大きな道、広い道にしていくために、私たちの使命があるというふうに思っています。

そして、ラスティも言っていましたけれど、柔道というのは自分自身の表現の一つです。柔道をするのが重要なわけではなく、柔道で強くなるのが目的ではなくて、ラスティは試合がしたかったのにできなかった、女性だからできなかったという思いがあったのです。つまり、やりたいと思うことができるような世の中にする、女性だから、男性だから、障害があるからないから、そういうことではなく、やりたいと思うことができるような世の中にしていく、そういう社会を創るということが必要なんだというふうに思います。

環境が整って、今の選手たちの競技力は非常に上がっています。でも、人間が強くならなければ、試合場でどんなに力を発揮できたとしても、一個人として社会人として自分の言いたいことが相手に言えない、はっきりと主張できないのであれば、ある意味柔道で強いと言えないのです。柔道で何を学んでいるかと言ったら、自己表現をきちんとすることなんです。柔道というのは常に主体的に動かなければ技というのは生まれないのです。相手が掛けてきた技を返すというのはありますけれど、技を掛けるという行為は自発的な行為なんです。自分が何かやるということなんです。そういったことをやっているにもかかわらず、人間としてそれができずに柔道の上だけであれば、成長したとは言えない。つまり、女性が自立する、自分自身で立って戦うという意味ですね。戦うというとちょっと重いかもしれませんが、きちんと自分の足で歩き、自分の思うことを発信していくということができていかなければいけない。

そして、柔道は一つのロールモデルです。ラスティが言ったように、柔道でできたということは他でもできるはずだ、それを発信していくことが、私たちに課せられた使命の一つであると私は感じています。

女子選手はなぜ訴えたのか

先ほどもご紹介がありましたけれど、15人の女子柔道選手たちが訴えを起しました。彼女たちは何を訴えたかったのかということなんです。一般的には、殴られていた、暴力を振るわれていたということが前面に出がちだったんですけれど、彼女たちがやはり最も訴えたかったことは、自分たちを信じてもらえなかったということなんです。女子の選手たちに男子のコーチたちが多くいますけれど、コーチたちは、「金メダルを取らせたかったから、いわば追い込んだ、殴ってしまったんだ。申し訳ないと思っているけれど、金メダルを取らせたかったから」というふうに後でおっしゃっていました。確かにその気持ちはわからないでもないです。柔道というのは金メダルを取ることが当たり前のように思われていますので、コーチたちのプレッシャーも計り知れないものがあるというのはわかります。

ただ、それはそれとして、考えなければいけないのは、女性だといっても日の丸を背負う選手たちです。日本を代表する選手たちなんです。その選手たちが女だから男だから関係ありません、やらせられなければやらないというふうに思われたということが、彼女たちにとっては何より苦痛であったと。女は殴らなきゃやらない、言われないと動かない、力を抜く、というような考え方がされていたということに対して、私たちは怒りを覚えたというようなことを選手たちは言っていました。

彼女たちは、ナショナルチームに入る時にやはり夢を持って入ってくるわけです。日本の最高峰のチームである。それはそうです。世界を目指す一番最先端に立っている。私たちが今までやってきたことがさらに活かされて世界を目指していけるに違いない、と思った時に、そこに入った途端に、自分たちがこうやりたいとか、ああしたいとか、強くなりたいということではなく、「お前たちはこうやれ」と上から指示される。「俺たちの言うことを聞いていればまちがいない」。何かを言うと、「理屈を言うな」。そういうふうには支配される。私たちが考えていた、夢を持っていたナショナルチームというのは何だったのだろうか。そこに彼女たちは失望し、「尊厳」という言葉を彼女たちは使っていましたね、自分たちの尊厳というも

のが踏みにじられた気がしたと。自分たちは勝ちたいと思っている、勝ちたいと思っていない人間なんて一人もない、みんな勝ちたいと思っているんだ、それを認めてもらえなかったということにとっても辛いものを感じたというふうに言っていました。

ただ、私がその時彼女たちに言ったのは、「じゃあ、なぜ言わなかったの」と。先ほど言ったように、「競技で強くても、コーチたちに対して嫌だったら嫌だとなぜ言えなかった」と。ひとこと言えば流れは変わったかもしれない、大事にならずに。こんな社会的な問題になって、柔道全体が被害を被ることになった。そのことについて彼女たちもとても憂えてました。柔道が悪く思われるというのは私たちの本意ではない。でも、言わざるを得なかった。なぜここまで来てしまったんだろうか。彼女たちの中にも苦悩がありました。なぜ言えなかったのか。でも、それはやはり、だからこそ私はハラスメントだと思うのですが、「選手を選ぶ決定権はコーチにあるんです。私たちは嫌われたら使ってもらえないんです。ここで、卓袱台をひっくり返して喧嘩することもできました。でも、もしそうして、そこで選ばれなかったら。オリンピックは4年に1回のことなんです。やっぱり、選んでもらう人たちに対して盾突くことができなかった」というようなことを言っていました。だから、そのせめぎ合いの中で苦悩していた選手たちのことを思うと、本当に忸怩たる思いがあります。彼女たちは強くなかったわけではない。でも、もしかしたらやり方が何かあったんじゃないかと考えるところでもあります。

でも連盟の体質であったり強化の体質に対して、私たちは外側といえますか、ど真ん中にいたわけではありませんけれど、わかっていたわけではない。でも、皆が見て見ぬふりをして、何となく感じていたのに、外の人間も何も言えなかった。あの子たち大変だよ、きっと苦労しているよ、と思いつつも手を差し伸べることができなかった。そういった状況でお互いが不幸になっていったということを、私たちは受け止める必要があるというふうに思っています。

女性スポーツの現状

今柔道の話をしました。女性スポーツの現状を少し申し上げますと、ロンドンオリンピックでは26競技が行われ、その全てに女性が参加しております。そしてこれはオリンピック史上、先ほど言いました近代オリンピックが始まって以降100年以上の歴史を持っていますが、初めてのことです。最後に正式競技に追加されたのはボクシングです。

そしてこれも画期的なことですが、参加した204の国と地域がすべて女性の選手をたった一人であろうとも派遣をいたしました。だから、ロンドンでは女性の選手団のいないチームはなかったということなのです。これはIOC、国際オリンピック委員会の尽力だったと思います。今まで女性の派遣の実績のない国に粘り強く働きかけて、女性も参加させてくれと交渉したというふうに聞いております。

そして日本選手団を見ると、男性が137人、女性が156人です。もうロンドンオリンピックでは、男女の参加人数は女性のほうが多いのです。メダル数は男性が21個、女性が17個、金メダルでいうと男性が3個、女性が4個。メダルの数でもほぼ拮抗してきています。

そういった状況の中ではありますけれど、課題としては役員・指導者の割合が少ない。ここまで女性のスポーツ、競技がさかんになった現在であっても、指導者あるいは意思決定機関と言われる理事会のボードメンバーとか役員クラスには女性の数が極端に少ないということが言われています。このあたりのところを少しずつ改善をしていかないと、なかなか色々な女性のスポーツに対しての施策であったり、強化方法であったりというところで、男性が悪いというわけではないのですが、でも男女で話し合っていくということ、女性の割合が多くなっていくわけですから。男性と女性というのは、持っている要するに生理的なものが違います。そこをわからないということ、男性と同じようにすることが女性にとってはマイナスになる可能性もあるので、そういったところを手当てしていくというのが今後の課題かなというふうに思われます。

女性スポーツは偏見との戦い

「女性スポーツは偏見との戦い」とちょっと厳しいとかきつい言葉になっていますけれど、メディアによって描かれるジェンダーバイアスみたいなものは少なからずあるかなと思われまます。「幼児化」「性愛化」、ファーストネームで呼ばれる女性アスリート。ただ、気を付けていないと見過ごしてしまうというのか、いいんじゃないというふうに思ってしまうところというのは絶対ありますよね。そういうところを気を付けて見ていくことが大切なのかなと考えています。

たとえば卓球でいうと、小さい頃から活躍しているということもありますけれど、卓球の愛ちゃん。愛ちゃんは多分40歳になっても「愛ちゃん」でしょうね。柔道だってそうですよ、柔ちゃん。今はもう柔おばさんというか、だいぶ年齢も上がってきましたけれど、やはり「柔ちゃん」の愛称で知られている。真央ちゃん。言ってはなんですけど、みんないい大人ですよ。でも、その人たちに対して「ちゃん」付けで呼ぶということを、意識していないけれど私たちがやはり許容しているんだと思うのです。そこに対して違和感を感じないんです。でも、羽生結弦くんを「ちゃん」とは呼ばないですよ。 「くん」というのは「ちゃん」と同じような意味合いがあるのかもしれないですけど、でもやはり男性のアスリートとは少し違うなという感じがします。それは何というか女性の選手たちにとってもあまりよろしくないという感じがします。つまり可愛らしさを強要されるというのですか、大人になっていくということに対して、何かこうハードルを上げていくような、そんな感じもしないでもない。

浅田真央選手は今回ソチオリンピックでとても頑張ったと思いますし、メダルは取れなかったけれども非常にいい演技をしてくれたと思います。ただ、たとえば韓国のキム・ヨナ選手と比べると、同じ年とは思えない。内面の強さはわかりません。でも、外から見たときの自立感とか強さというのは、個性かもしれないけれども弱々しく感じてしまうというのは、もしかしたら私たちがもう既に、このジェンダーバイアスじゃないですけど、浅田真央選手に対して何かかけられているものを受け入れてしまっ

ているのかなという感じがしなくもない。でも、もしかしたら彼女たちの持っている強さがもっと前面に出せるような、出しても憚られないようなものであれば、もしかしたら女性アスリートというのはもっと伸び伸びと、競技という場面では強く激しく戦うということが可能になっていくという可能性もあります。

海外の選手たちと比べると、日本の女性アスリートというのは、私から見ても何となく弱々しさを若干感じます。そうかと思うと、ロンドンで柔道で金メダル取った松本薫のようなとてもすごい形相で向かっていく、ああいう子もいますから、色んな選手がいますけれど、全体的にはこういう傾向があると思います。

それから、一流アスリートを「主婦」あるいは「母」にしたがる。日本では遅れていましたけれども、近年トップアスリートの選手たちが、医科学の進歩もあって、また社会の変化もあるでしょう、以前の私たちの頃に比べると競技年齢、競技寿命が確実に伸びています。ですからその延長線上に、女性としてのキャリア、結婚・出産・育児といったところも両立させながら、アスリートとしても頑張っている選手たちが少しずつ出てきています。諸外国に比べるとまだまだ少ないのが現状ですけど、確実に増えてきています。でも、そういった選手たちを「主婦」とか「母」にするというのがありますが、ここに一言付け加えるのならば「女の子」にしたがる。これは、メディアがというよりもやはり社会がそういうものを望んでいるのだらうなと思えますよね。

なでしこにも結婚していらっしゃるアスリートもいますし、お子さんを持っている方もおられるのですが、NHKがニュースの枠を使って何を放送していたかということ、ある選手の私生活というかプライベートなことを言っているんです。「この選手はピッチに立つと勇ましく、とても勇敢にプレイをしますが、ピッチを下りると一女性としてとても女らしく、誰々さんのために誕生日の時にケーキを作ってプレゼントしました。そんな女性らしい一面が見えます」みたいなことをNHKがやっているんです。私ももう目が点になりました。それはニュースソースとして上が承認したからそれが映るのだと思うのですが、でもそれはスポーツニュースでは

ないですよ。違うところ、文化とか家庭とかそういうところだったらまだわかります。この選手の人となりみたいな、それは男性でもあるでしょう。でもスポーツニュースで、それも試合のニュースの合間にやっているんですよ。何とか戦で、その試合のことではなく、「その試合の日が誰々さんの誕生日で、その人のためにケーキを焼きました」みたいな。そんなことはどうでもいいことなんです、私にとっては。それよりもこの試合で勝った負けた、どうして勝ったのか負けたのかのほうが大事ですよ。でも、そうやって報道するのは、女性に対してだけです。

今回Jリーグ、ガンバ大阪が優勝いたしました。また、ガンバ大阪は三冠達成なんですよ。前はJ2落ちの屈辱を味わったんですけど、復帰してすぐ、素晴らしい。そしてMVPは遠藤選手。これもまた素晴らしい。おそらくMVPを最年長で受けたのではないですかね。彼もお子さんが何人もおられるんですよ。何人いるかは知りません。遠藤選手に「家に帰って、やっぱり子どものお弁当とか作るんですか」とか「奥さんの代わりに送り迎えもするんですか」と、記者は聞いているかもしれません。でも絶対にNHKのニュースには載りません。だからこのところが、女性をアスリートとして報道していないのです。そして、報道の裏側に何があるかという、こんなに強いけれども実は女性らしいという、報道局の、メディアの持っている、その女性らしさというところをアピールしたいんですよ。そっちが本当なんですよ、こっちは仮の姿でと。女性がスポーツで活躍すればするほど、自分たちの持っている女性らしさとは対極にある、という意図を何となく感じる報道が結構あります。ただ、私も意識して見ていなければ気がつきません。さらっと流してしまうんですよ。「何とかちゃん」と呼ばれて、犬連れて歩いてたりする。「ああ、可愛いね」で終わっちゃうんですよ。でも、男性アスリートと比べて、きちんとアスリートとして評価されているだろうかというところをやはり見ていって、そしてきちんとそういうことがメディアに報道されるようになって初めて、女性アスリートの地位というものが確立されていくのではないかと思います。

私は女子柔道で最初の頃にやった人間ですから、今でも覚えています。やはりメディアというのは社会の反映だと思うのですが、当時私がいつも

どういうことをインタビューされたかという、「柔道衣の下には何を着ているのですか」「やっぱり晒ですか」みたいなね。その当時は晒ではなくてTシャツ着ていましたけれど、まずその話なんです。「痴漢にあったらどうしますか」「男の人と対決したら勝つ自信はありますか」とか。何というんですか、私もそういうような経験をしてきたのですけれど、ただ、社会の人の興味はそうだよねというふうに見過ぎてしまっている。当時は百歩譲ってしょうがない。女性のアスリートは珍しかったし、女性のスポーツなんかもまだ一般化されてなかった。でも今でも変わっていないんだというところ、今これだけ、先ほど見せた数字ですと女性のアスリートのほうがオリンピック代表になっているわけです。にもかかわらず、女性のアスリートはこういったバイアスを掛けられているということを少しずつ私たちがまずは意識をすることだと思います。それをどう変えていくのかというのはまた次のステップですけれど、こういう現実があるんだという目で報道を見ていくことが必要かなと思います。スポーツに求められるもの、それは鍛えられた肉体であったり、いろんな脂肪とかをそぎ落として戦える、競い合える体を作っていきます。おそらくそれが、先ほどの何十年も前の新聞の「女性らしさが失われるんじゃないか」という危惧が、まだ社会に残っているんだということが現実なのかというふうに思います。

これはアメリカのサッカーの選手です。何かの大会で勝ったんですね。シャツを着てたんですけれど、喜んで脱いじゃったんです。サッカーって何で脱ぐんですかね。よくわからないですね。何か日本人とはちょっと違う文化ですね。喜ぶと同時に男性の選手も脱ぎますよね。でも男性の選手が脱いだといってもニュースにはなりません。ところが、女性の場合は脱いでどういうふうに新聞に表現されたかという、これアメリカの新聞ですよ、「鍛えられた女性アスリート」「レズビアンか」「ストリップか」「岩のように固い腹筋」。おそらく、クリスティアーノ・ロナウドが脱いでものすごい腹筋を出したからといって、「ゲイ」とは言われなくても、「ストリップ」とも言われなくても女性だから。でも脱いだといっても全部脱いでいるわけじゃありませんから。要するにこういうような印象をメディアの人たちも持っている。これは堂々と報道されているんです。これ

がツイッターとかフェイスブックとかいった SNS、そういった個人的な感覚ならまだわかります。でも報道ですから。それはメディアの持っている、イコール社会の持っている女性アスリートに対してのものなんだということが見てとれるかと思います。

女性のスポーツの発展

女性のスポーツの発展というのは、女性の解放の歴史でもあって、戦いの歴史でもあったと私は思っています。現在でも世界の多くの国では、女性や女子が自由にスポーツを行えない国がまだまだあります。やりたくないという女子も日本にはたくさんいます。中学生で水着なんか着たくないというのもあります。体育なんかやりたくないという人もいます。やりたくない子に無理矢理やらせる必要はありません。でも、やりたいのにできない。教育を受けたいのに、教育を受ける権利があるのに受けることができないというのは問題だなと思います。

そして女性のスポーツの発展というのは、ある種女性の自立の証でもある。これは何年か前の新聞なんですけれど、この方はモロッコの方です。現在、国際オリンピック委員会の副会長です。女性で初めて国際オリンピック委員会の副会長になりました。彼女は男女合わせてモロッコ初の金メダリストです。さらに言うならば、イスラム圏初の女性の金メダリストです。非常に教育のレベルも高くて、三か国語くらいを自由に操って、とても聡明な方でいらっしゃいます。彼女のような方がオリンピック委員会の副会長になったということは、女性のスポーツにとってはとても大きな一歩を踏み出したと思っています。先ほど、204 の国がロンドンオリンピックに参加したと申しあげましたが、イスラムも含む 204 のすべての国が女性の選手を一人であっても参加させたというのは、彼女の貢献もとても大きかったと思います。ですから、そういったことで少しずつではありますけれど、進化というか進歩はしていています。

アスリートや指導者が持つ間違っ知識

実際の現場で、アスリートであったり、指導者が持っている間違っ知識。まだまだ女性のスポーツの現場というのは、先ほど言ったようにスポーツというのは男性から入っていますから、アスリートといっても男性の強化が主体なんです。男はこうだったから、女はまあ半分くらいのトレーニングでいいんじゃないか。あるいは男はこうだから、女はこのくらいやらせればいいんじゃないか、こういうやり方でいいんじゃないか。女性特有の身体的特徴であるとか、発育・発達のレベルに合わせて強化をしていく、強いアスリートたちを作っていくということころまでは、まだまだ至っていないのが現実です。そこに向かっていく中で、私たちオリンピック委員会も含めて、今女性アスリートを支援していく体制、システム作りがやっとスタートしたところですよ。これから2020年に向けて少しずつ進んでいくかなという期待はしています。

では、女性というところでいうと、どういうことが問題なのか。たとえば、ピル。一つデータがあるんですけど、ピル、いわゆる低用量ピルと言われるものですね、たとえば月経を操作したりというようなことに使うのですが、先進国のアスリートたちの多くはこの低用量のピルを使っています。それは、大きな大会に月経が重ならないようにするように操作する、あるいは飲み続けることによって体調を整えるというようなことで使っています。一つのデータであるのは、ノルウェーは40%以上のトップアスリートたちがこの低用量ピルを通常的に使っています。ところが、日本でトップアスリートで低用量ピルを使っているのは、わずか0.2%です。ではなぜそこにハードルがあるかと言うと、女性と月経というのはセットのようなことで、スポーツの中では大きな問題なのです。ただ、その低用量ピルに対する社会的な観念が女性のアスリートたちにも被さっているということなんです。未だに低用量ピルは太ると思っている女性は一般の人たちでも多いはずですよ。そして、単に避妊の薬であると思っている。でも、私ももう更年期を迎えるというか、今真っ只中の感じもしますけれど、私はアスリートの時には低用量ピルを一、二回しか使ったことがなかったん

ですけれど、更年期において使ってみてよくわかったのは、なんでアスリートの時に使わなかったのかなと思いましたね。定期的にきちんと月経は来るんだけど、月経が来ても2日、3日、非常に軽く済む。そして副作用も私の場合にはほとんどなかった。もちろん、これは個人差があります。それは日本だけでなく世界各国の女性も同じ問題を抱えているとは思いません。でも、きちんと容量を守って、お医者さんに相談して服用すれば、コンディショニングに役立つはずですよ。アスリートは極限の状態までトレーニングしているのにもかかわらず、月経の問題と正面から向き合えないというのが日本の女性のアスリートだということです。

じゃなぜ向き合えないのか。まず、産婦人科、婦人科への受診のハードルがものすごく高いですね。これは一般の女性も一緒だと私は思います。それは私くらいの年齢になれば、別に誰に見られたってなんてことないですよ。でも、ジュニアの選手、十代の選手がお母さんを伴って行ったとしても、トップアスリートが婦人科を受診しているのを一般の人たちが見たら、世間の人たちが何と思うか。「なんかあったらしいわね。あの子いたわよ。婦人科に」。でも、それはジュニアの選手だけが受けるんじゃないくて、中学生だって高校生だって、女性の発育発達の段階で、この月経周期ですとか、あるいは子宮の問題とか、色んなことで問題を抱えている女の子たちというのは少なからずいます。月経困難症であったり、月経痛で苦しんでいたりと。でも、そういったところで、内科や小児科や眼科、そういったところに行くのと同じように私たちが婦人科を受診できるかということ、日本ではまだまだそのハードルが高いと思います。だから我慢をして、アスリートたちも問題を悪化させているケースもあります。百歩譲って避妊の薬だとしても、それは女性の権利だから誰かから咎められる必要はないと思うのです。アスリートは産む権利もあるけれど、それは選択です。そういった意味でまだまだ女性が選ぶ、選択するということの権利がアスリートにとっても認められていないし、またそれを選手たちが、まあ主張もなかなかできないんですけれど、それが現実だということです。

また、これも問題なんですけれど、生理はない方が楽でいいと考えられていること。女性の選手は統計的に見ると、体脂肪率が15%を切ると生

理がなくなると言われています。ですから、種目で言いますと陸上の長距離、新体操、それから体操競技、フィギュアスケート、このあたりが月経困難症と言いますか、無月経であったり、定期的に月経が来なかったりという問題を抱えているというふうに言われています。ただ、選手たちにとっては、ない方がいい。もっと言えば指導者は何と言うか。不勉強なところが多分あるので、それは私たちが啓発していかなければいけないのですが、男性の先生たちも、体重を減らせば月経がなくなるといえるのは知識として知っているんですね。ですから、若いジュニアの選手たちをつかまえて、「月経があるということは、お前たち練習が足りない。お前まだあるのか。隣の選手見て見ろ。あいつはないだろう。だから、記録がいいんだよ」。ただ、これほど不勉強なことはなくて、月経がなくなるといえることは、ホルモンの関係で、いわゆる更年期が終わって月経がなくなった状態と同じ状態になるわけですから、カルシウムの吸収率が極端に下がります。ですから、無月経の選手たちは月経のある選手に比べて疲労骨折の割合が3倍です。でも、そういったことを指導者も女性のアスリートたちもまだまだ熟知していないというのが現実なんですね。ですから、一方でものすごく一生懸命メダルを目指して戦っていて、極限まで追い込んでいるにもかかわらず、疲労骨折を起こして、本番では戦えない。要するに何のために頑張っているのかよくわからないというような状況になっているのです。そういったところの意識を変えていく必要があるのです。女性と男性の体は違うということを学んでもらうように指導者の人たちにも教えていく必要があります。

また、「女は最後まで力を出し切れない」。これはなにか盲目的に信じられていることなんですね。「女は子どもを産むから、最後に力を蓄えているんだ。あいつらは苦しい顔しているけど、絶対まだ力を残している。男は最後まで出し切る」。男性の指導者がよく言います。このような選手は、男だって女だっていると思います。男だって力を出し切れない人もいれば、本当に自分で追い込める人もいます。女性だって同じです。それを単に男だから女だからということで括っていると、それが意味ハラスメントといふところにもつながっていきます。

そして、男性の指導者がいいか悪いかではなくて、女性がスポーツに入ってきたのが後付けですから、アスリートとして活躍して次のキャリアとして指導者になっているという女性が当然まだ少ないので、これだけ女性の競技がさかんになっても、割合としては男性の指導者の方が圧倒的に多いです。だから男性の指導者がいいか悪いかではなくて、ただその男性の指導者の人たちが女性をどう見るかということが、女性のアスリートをどう育てるかということにつながるということを私たちは訴えていかなければいけないし、男性の指導者を指導するというとちょっとおこがましいですけど、わかってもらいたいし、やっぱり変えていってもらいたいというのが実際のところなんですね。

女性を自立させたくない指導者たち

これは柔道のチームですけれど、女性限定で柔道をやっているチームがあります。実業団です。ここの先生は高校卒業の女の子しか採りません。大学卒業した女性の選手は一切採りません。これは何でだと思いますか。その先生が言うには、「大学を出た女は生意気になる」。そんなこと言ったら、大変ですよ。世の中生意気な女ばかりですね。でも本当にそういうんです。変な知識を一杯持ってくる。理屈を言うようになる。俺の言うことを聞かなくなる。昔の白無垢と一緒にだと私は思いましたね。色をつけないで来てくれ、俺が色をつける。今でもそんな時代なのかと私は思いますけれど。未だにそういう人もいるよねというものもあるんですが、ただよくよく女性のスポーツを考えてみると、この傾向は強いなと思いました。その裏側には、理屈っぽい女が嫌だということだけではなくて、色んな要素があると思います。皆さんに社会の仕組み、システムとしてというか傾向として見ていただきたいのは、女性アスリートと男性アスリートと比べたら、圧倒的にトップアスリートの女性は高卒が多いです。陸上競技、サッカー、バレーボール、体操。体操の指導者は「大学にやると、太って、すぐ怪我して駄目になる、自分で管理できないから」といいます。私は、管理できない子だったら、別に大学に行って駄目になってもいいじゃないか

と思うのです。それはその子の人生であって、大学に行かせないで実業団でずっとその人に管理されて、その子の人生が幸せかということ、私はちょっと違う気がしますね。

親の意識もあります。指導者の意識もあります。たとえば、高校で教えていた先生。皆さん、お子さんがおられるかもしれませんが、男の子と女の子ってやっぱり違うと思っていらっしゃるでしょうか。男の子でサッカー、野球は私は違うと思います。プロがありますから。男の子で、実業団ではなくプロを選ぶ時には、大学をスルーしてJ1とかプロ野球があります。でもそれ以外で、高校を卒業して敢えて大学をスルーして実業団に入る男の子というのは非常に稀です。それは親も、男の子はせめて大学は出させておかなければという意識が心のどこかにあると思います。

それに比べて女の子の場合には、「まあ女だからいいんじゃない、今頑張らせれば」。確かにそういった意識があるはずです。高卒であろうと、今頑張って、金メダルを取れたらいいです。でも取れない人たちもたくさんいる。そうなった時に、女性であっても男性であっても同じですが、やはりある程度の教育を受けていなかったら資格も取れません。女性の指導者が足りないのは、学歴という背景も関係があるはずです。実業団で、そこで就職して終身雇用で働く女性もいるでしょう。でも、多くの指導者の人たちが未だに考えているのは、「女は結婚すればいいんだから」。最近では結婚だって簡単にできる時代ではありません。女性に対してはそういうふうに安易に考えられている。だから指導者を作ろうにも、作るシステムになっていないんです。オリンピックで金メダル取ったって資格がなくて指導者になれないケースもあります。社会はそういうところにあまり気付いていないのです。

大学のスポーツを皆さん思い浮かべてください。男子の大学のスポーツはいくらでも思い浮かびますよ。昨日でしたか早稲田と明治がラグビーやっていましたよね。サッカーだってそうですね。駅伝。女性で大学で活躍している選手って思い浮かびますか。あの人確かあの大学よね。私が名前を挙げてみれば、いるんですよ。でも、割合としては男性に比べたら少ないということなんです。もちろん、彼女たちの選択です。ただ、そこにき

ちんと情報を与えて、将来のキャリアということを考えさせて、「この何年間か実業団でやった後、あなたは何をしたい？ その後どうしたい？」というところまできちんと説明をして選んだのだっただけだと思います。でも、そういったことを抜かして、「まあいいよ、女だから。これでやれよ」と言う。

指導者の姿勢もありますね。理屈っぽい女は採りたくないということは、自立させたくないんです。あるバレーボールの選手に話を聞いたことがあるんです。実業団に所属していた元選手です。二十歳も過ぎた大人がシャンプー一つコンビニに買いに行くのに監督の許可が必要だったと言っていました。なんで選手は文句いわないのかと思いますよね。でも小さい時からそういうふうにされてきているから、もう当たり前のように思ってしまうんです。そうやって管理されるということが当たり前になってしまっている。でも正直言って、そういう選手は強くなりません。管理しないと強くならないと指導者は思っていますけれど、管理して強くなるのには限界があります。管理できるところまでです。

テニスの錦織選手が活躍していて、私はあれがスポーツのあるべき姿だなと感心して見えています。それは何かと言ったら、もう柔道もそうになっていいと私は思っているのですが、監督とかコーチというのは観客席で見えていますよね。一切声も掛けません。マイケル・チャン、あの方は優秀なコーチで、彼がついてから錦織選手はとても競技力が向上した、と言われていきますけれど、試合中は一言も声を掛けませんよね。劣勢の時もあります。あのコートチェンジの短い時間に汗をタオルでぬぐいながら、苦しくてどうしていいかわからない、泣きたい気持ちもあるでしょう。日本中の人が見ていて応援してくれているのに、もう何やっても駄目だという時はありますよ。でもその時、コーチが何か言うんじゃないんですよ。もうあの世界では、自分で何とかするしかないんです。そしてそれができない選手はトップアスリートとしてやっていけません。それはサッカーだってそうですよ。最終的なところでいったら、ボールを受けた選手が、いくらアギーレ監督やザッケローニ監督が優秀だといっても、「シュートしろ」と言われてからしたのでは、もうボールはないですよ。それは当たり前なこと、わかっているんです。でも、そういうことを指導者はわかっているのに、

なぜ管理したがるかということなんです。

これは女性に対してだけではなくて、男性にも同じだと私は思います。たとえば、体罰をしてしまった、暴力をしてしまった監督たち、その人たちのなんとというか裏側というのを見ていくと、彼らの生きていく場所はそのスポーツ現場しかないんです。非常に熱心なんですけれど、他の生活がある意味ない。日曜日でも土曜日でもずーっと試合に行っていて、子どもにも「パパ、また来てね」って言われて送り出されたりする。決して幸せではないと私は思います。その人たちが拠り所になっているのは選手だけなんです。信頼されている、俺がいなきゃ駄目なんだと信じたいのです。そこしかも生きていく道がないんです。この女の子たちはみんな俺に向いているんだと思いたいというか。男の子だってそうなんですよ。そういうふうなスポーツ界というのは、若干ゆがんでいると思います。

だから、スポーツの指導者に申し上げるのは、スポーツ環境だけではなく、自分が指導しているチームだけではなくて、他にも幸せを見つけてください。そこでは、「先生、先生」と言われるけど、家の中では「あら、お父さん、今日は帰ってきたの」と言われているのでは。家の中には居場所がないという人もいます。誰とは言いませんけれど、柔道のある先生が、「俺の家の中での地位は犬の下」と言っていました。それは本当かどうかわかりませんが、家族がそういうふうに扱っているわけではないんです。けれど、いつもいないから、時々帰ってくると、どうしても奥さんも順番があるから犬のほうに最初にご飯を出したりしてしまうらしいんです。「俺は犬以下なんだよ」とこぼしていらっしやっただのを思い出します。でも、そういうふうに思えば思うほど、こっちにまたゆがんだ力が向いてしまうんです。だからそういう意味では、管理というよりは依存です。そのチームやその選手に指導者が依存し過ぎる。それしかないとしがみつく。それは両者ともです。選手もそうです。この人について行かなかったら、私はやれないんじゃないか、勝てないんじゃないか。この歪んだ構造を正していかなければ、世界のトップで活躍するような選手というのはなかなか生まれにくい。

恋愛も禁止。この少子化にあって、恋愛を禁止してどうするのか。もち

ろん、節度は必要です。ですけど、ある程度の年齢になったら男性であれ女性であれ、そういうことに興味を持たない方が不思議です。隠れてだって恋愛しますよ、適齢期になったら。その方が正常です。スポーツ選手は全く男にも女にも興味ありません、その方が怖いですよ。でも、禁止したいんです。「俺しか見るな」というんですから。これもバレーの元選手が言っていましたけれど、やっぱり監督ではだめだと監督も気付くらしいですね。年齢も上だから。「俺だけ見ろ」といってもなかなか難しい。だから、若いコーチを置くんだって言っていました。いや、本当にそうらしいです。戦略的に置くって言っていました。それで、そのコーチを皆で取り合いさせる。「あの人に認めてもらいたいから頑張れ」みたいなふうにチームを作る。恐ろしい。元選手の人が言っていたので嘘ではないと思います。だから、女子バレーのチームには必ず若い男のコーチがいるのよと。

それから、これも未だに言う人がいるのですが、「女はね、泣かせてから抱きしめれば言うことを聞く」。私は、「女なんかそんな単純じゃない」と、そういう先生にも話しますが。今どきの選手たちと言ってはなんですが、したたかな女子もいます。私は女の子を教えてきてわかりますけれど、泣くのなんて簡単なんです。私が怒る前から泣いてるんです。「まだ、怒ってない。泣いても許さない」と言うんですけれど。でも、男の監督とか若いコーチとかですと、やっぱり泣かれると「ハァー」って思う。どうしていいかわからなくなるとかいう人もいます。「今どきそんな純情な女の子いないですよ。先生、それは少女コミックの読み過ぎです。昔の『アタック No.1』じゃあるまいし、何十年前の話をしているんですか。先生の方こそ転がされてますよ。『あの先生、泣いたらイチコロよ』と。そんなもんですよ」と言っているんですけれど、そんなふうに思っている人がいます。

それから、「俺は選手の全てを知っている」。これは親にもありがたいですけど、子どもが学校に行きだすと、いかに自分の子どもを知らないかと気付きますよね。うちの子に限って、なんていうのは序の口ですよ。でも、それが自立だと私は思います。親の知らない顔を持つこと、親の知らない仲間を持つこと、付き合いを持つこと、それが大人への第一歩です。みんな私が知っているということは、自立できていないということです。

全部報告する必要もないし、選手だって同じです。「監督が全てを知っている」と、私はそれを聞いた瞬間に「ああ、この選手はたいしたことないな」、それか「指導者がこの選手を知らないだけだな」と思うようにしています。でも先ほど言ったように依存していますから、そういうふうに思いたいのです。この子だけは俺を裏切らないと信じたいんです。でも、それがその子の自立のため、つまりその子のためを思っているのではなくて、結局は指導者たち自身のためなんです。その子を強くしたいとかその子をなんとかしたいのではなくて、俺がいたから勝ったと言わせたい。俺のためだと思わせたい。そこに自分の満足感が得られるからなんです。

何度も言いますが、すべての指導者がそうではありません。でも、そういう指導者もまだ意外と少なくない。だから体罰もなくなるんです。いいことだと信じているんです。俺は命をかけてあいつらをよくしてやってるんだと、いつまでたっても言う先生がおられます。でも、スポーツというのはルールによって成り立っているんです。サッカーにもいましたね、噛みついた人が、噛みついたら駄目なんです。サッカーは、いかなる理由があっても噛みついたり頭突きをしたら駄目なんです。それが、スポーツにおいて社会のルールを教えるということなんです。駄目なものは駄目なんです。でも、そのスポーツのルールを教える先生たちのほうが、社会的に駄目だと言われていることを、「俺がお前のためにやっている」。それはもうルールからはみ出しているということを気付かれないんですね。「他の方法はない」。ないことはないと思います。社会生活の中においては、上司が一回一回、自分の部下が言うことを聞かないで殴ったり蹴ったりしていたら大変なことになりますよね。トップアスリートを教えている先生たちは、みんな大人を相手にしているんです。高校生だって、言葉はわかるんです。「言葉で言ってもわからない」。わからないのだったら、どうやってわからせるのかということを一生涯考えるのが指導者なんです。頭ごなしに「こうしろ、ああしろ」と管理していくことが指導ではありません。管理された子というのは、生涯管理されないとできない人間になってしまいます。その先生についていたら、もしかしたらいいかもしれません。でも、その先生から離れて一人で自立してやっていけるかといっ

たら、そうはなかなかならないです。

熱心なのか、セクハラか？

「熱心なのか、セクシュアル・ハラスメントなのか？」というこの部分も、熱心な先生ほど陥りやすいところです。この部分も指導者の先生たちにお話しさせていただくようにしています。「お前、生理はいつからだ」。大人になってくれば、別に隠すことでもないし、お互いの競技として向かい合うのであればそれはそれでいいと言う人もいます。でも、ジュニアの選手、思春期の選手たちに「生理はいつだ」。じゃあ監督が知っていたからどうなんだという話でもあるわけです。そこにちゃんとした理由があればいいんです。でも、単に聞かなければいけないということでもないですね。でも、全部を知っていなければいけないと思っている監督さんがいます。

それから、「マッサージはコーチの役目だ。俺が触ると調子がわかるんだ」。すごい人がいるんです。

「ちょっとテーピングしてやるから、脱げ」。そう言われた時になかなか「NO」と言える選手は、特にジュニアの選手はいませんよ。さっき言ったように、監督には決定権があるんです。特にチームプレーの時、団体競技の時には、監督に選んでもらわなければレギュラーになれないんです。好き嫌いではないと思います。でも、嫌われたら選ばれないという恐怖感は絶対選手たちについて回ります。もちろんその監督が「テーピングしてやるから、脱げ」と言っても、特に意図はないかもしれませんが。でも、そこが踏み越えてはいけない一線だということを、先生たちは理解しなければいけないのです。選手が嫌がらなかったからいいとか悪いとかそういう問題ではないのです。駄目なものは駄目なんです。それはもうスポーツのルールと一緒に、社会のルールと一緒に。ましてや先生はテーピングをする専門家じゃないですよ。そういう人間がいない。そうかもしれない。でもだったら、脱がなくてもできる何かそういう方法を見つけられませんか。女性と一緒に同席させてタオルをかけさせておくとか、何かやり方がありますよね。こういった配慮は先生たちを守ることもつながるんです。

先生は熱心だと思っても、当たり前ですけどハラスメントというのは、その選手が不快に感じたら訴えることができます。「俺たちの中では信頼関係があったんだ」と先生たちは後で言われます。でも、わかりません。なぜわからないか。私も選手を指導していて思いますけれど、日本の指導者と選手の関係の中において、異議を唱える選手なんてほとんどゼロなんです。私が何かを言えば、わかっているわかっていない、賛成反対に関係なく、「はい」と答えるんです。「こうだよ、ああだよ、こうしなよ」。「はい。はい。はい」。「わかった?」。「わかりました」。「何て言ったか言ってごらん」。「わかりません」。「わかってないじゃない」。選手というのはそんなものなのです。でもそれが、ある意味日本の社会です。スポーツというのは社会の縮図ですから、スポーツにあるということは社会にあるということなんです。でもだからこそ、上司であったり指導者であったり、上に立つ者はそれを頭の中において、「はい」と言ったから喜んで来たと思ったら大間違いだと、だから踏み越えてはいけないということを考えなくてはなりません。それから、「隠し事はするな」と言いますが隠し事はするものです。

女性アスリートの自立

女性のアスリートたちが競技場においても、社会的にも自立し、そして能力が発揮できるように私たちは育てていきたいというふうに思います。トップアスリートでなくてもいいですけど、アスリートとして重要なことは自立することです。自分で考える力、乗り越える力というのが必ず求められます。そして、そこで培った能力を社会の中に出た時にでも活かせるような女性を輩出していきたい、育成していきたいというふうに考えています。

日本の歴史や文化からいうと、なかなか女性はリーダーになる教育を受けてきていません。これは長い歴史の中で。安倍さんは女性の活用を掲げていますが、ただ活用しようと言ったからといって、すぐそういった女性たちが出てくるわけではないです。スポーツでも同じです。たとえば私が

色んなことを発言する、色んな立場になる。でも、一般のスポーツをやっている女性たちからすれば、多分社会も同じだと思いますが、「あなただからできるのよ」と必ず言われます。「あなたは特別。私はできないわ」。こういったことは、どの分野でもそうだと思います。でもだから私たちが目指していかなければいけないのは、そういう人たちを輩出していけるようなシステム、ラインです。

男の人には、言うてはなんですけれどラインがちゃんとあるんです。今男子の監督は井上康生です。井上康生は若くしてナショナルチームのヘッドになりました。でも彼は準備していましたよ、絶対に。いつか順番が来ると。山下さんがなった。斉藤仁さんがなった。その後、篠原さんがなった。ああやっぱりこういうラインで来ているんだから、俺もなるよな。準備しています。でも女性は、誰一人女子のヘッドコーチになったことはないのです。私も含めて。ということは、来るか来ないかわからないというよりは、来ないと思っているわけです。心の準備も何もありません。突然言われて、準備もしてないでやって、失敗すると、「やっぱり女だから」。やはり準備をさせて教育して養成していくシステムを作って、そして実用的なかたちで使っていくというふうにしていかなければ、突然ポーンとおいたからといって、それが機能するようにはなっていないと思います。多少の時間がかかっても、私はそのシステム、ラインを作っていく。私は2020年には女子の競技は少なくとも半分以上女性のヘッドコーチを置きたいと夢を持っています。そしてその女性のコーチが失敗しても、次の人は女性を持ってくる。女が駄目だから男ではなく。だったら、サッカーのザックが駄目だったら女の監督にしろと。今の男の子たちはマザコンだから、女の監督の方がいいんじゃないのという考え方が出てもおかしくないですよ。でも、そうはなりませんよね。男の人たちが守ってきたポストだったりラインではずっと、次はこう次はこうとなってきているんです。そういった仕組みを女性も作っていくべきだと思います。なにかこう、「私が私が」というのは嫌だなと私も思っていましたけれど、主張すべき部分は主張して、これは女性のポストとして回していきましょうというものをまず作っていくということも必要だなと思っています。

スポーツは社会の縮図

先ほどから何度も言っていますが、スポーツというのは社会の縮図だと思います。スポーツ界が抱えている問題は、社会が抱えている問題です。女性アスリートが抱えている問題は、多かれ少なかれ日本の女性が抱えている問題です。先ほどピルの話をしました。結婚・出産・育児、これもそうです。アスリートたちはアスリートとしてのキャリアが福田敬子先生の時代とそう変わっていません。気が付いたら出産適齢期。適齢期という言葉が合うかどうかわかりません。でも、出産にはやはり適した年齢というのは幅があるとしてもあります。いつでもというものではないです。でも、終わってから間に合わなかったと後悔しないように、あの時競技を続けていなかったら、と思わないように。福田敬子先生が後悔したとは思っていませんが、でも選ばなくてもよかったのなら、両方手に入れることができたんじゃないか。どちらかを手に入れるという時代ではなく、どちらも享受できるような社会にしていけることが大事なんじゃないかと思います。

終わりに

マララさん、17歳です。ノーベル平和賞。色んなことを彼女は言っていますが、私がとても感銘を受けたのは、「自分たちの権利のために声を上げ、私たちの声を通じて変化をもたらします。自分たちの言葉の力を、強さを信じましょう。私たちの言葉は世界を変えられるのです」。私は、女子の選手たちにも言いました、「誰かが言わなければ変わらない。あなたたちが涙をのんで我慢するということは、次の世代も同じ目に遭うということだ」と。彼女たちが立ち上がった大きな理由はそこです。「次の選手たちに同じ思いをさせたくない。私たちが声を上げることで、私たちが立ち上がることで変えることができるんだったら、やる」というような決意をしたわけです。一人一人が小さな力を発揮し、一つの言葉を発することによって変えられることもたくさんあるんじゃないかなというふうに思っています。